

琉球大学学術リポジトリ

パトグラフィ 「歯車」 (芥川龍之介)

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属障害児教育実践センター 公開日: 2008-05-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小澤, 保博 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/5955

パトグラフィ「歯車」(芥川龍之介)

小澤保博*

Akutagawa Ryunosuke's Psychopathological Method in Editing the Cogwheel

Yasuhiro OZAWA

1. ドッペルゲンゲル(「Doppelgaenger」 離魂病)¹⁾

「歯車(一)」(「大調和」昭和二年六月)は、平松麻素子との帝国ホテルでの心中が実行されたら芥川龍之介最後の作品となるはずであった。「歯車」(二～六)は、著者の死後に遺稿として残された。「歯車」は、主人公「僕」の意識の流れを精神分裂病的な症状に陥った臨床実例を「僕」が冷静に記述していく手法を取っている。煩雑な世俗的心労、打ち続く身の不始末の為に物事を正確に、具象的に把握する能力を失いかけている「僕」(「作品執筆時の著者の自画像に重なる」)は、かろうじて意識の流れの中で事態を正確に把握する事で対処しようと努力している。「僕」のこうした努力にも関わらず事態は、悪化の一途を辿り次々と「僕」は、より一層の困難な状況に追い込まれて行く。作中人物「僕」の意識の流れは、終始一貫統一しているようで、しばしば「僕」自身の記憶の欠落、あるいは理性の破綻で混乱を生じている。「歯車」で最初に頻繁に登場するのは、ドッペルゲンゲル(「離魂病」)症状である。

「歯車」作中「僕」の行動日程は、「帝国ホテル」で遺稿となるべき作品「歯車」執筆に余念の無い作者自身の自画像である。作中の「僕」の意

識の流れは、「帝国ホテル」で遺稿の完成に意を注ぐ作者の意識と同時平行である。芥川龍之介は、鎌倉小町園の女将野々口豊子宅に身を寄せて窮状を訴え、この愛人に駆け落ち話を持ちかけた(「田端帰宅」昭和二年一月二日)。「歯車」は、「僕」が神奈川県鶴沼の借家から知人の帝国ホテルでの結婚式に出席するために東海道線藤沢駅から乗車して上京するところから始まる。帝国ホテル滞在中の「僕」は、姉新原ヒサの娘(「葛巻さと子」)からの電話連絡で、姉の再婚相手西川豊の鉄道自殺を告げられる(「西川豊の自殺日」昭和二年一月六日)。

僕の姉の夫はその日の午後、東京から余り離れてゐない或田舎に轢死してゐた。しかも季節に縁のないレエン・コートをひっかけてゐた。(「歯車」一)

姉新原ヒサの夫西川豊が、千葉県山武郡土気トンネルで鉄道自殺を磨げる四日前から、東海道線の車中から芥川龍之介は、義兄西川豊の分身と同伴していた事を「歯車」(一)は、記述している。部外者である「或理髪店の主人」の言によれば明瞭にそれは、幽霊である。

「御常談で。……しかしレエン・コートを着た幽霊だつて云ふんです。」(中略)待合室のベンチにはレエン・コートを着た男が一人ぼんやり外を眺めてゐた。(中略)するとレエン・コートを着た男が一人僕等の向うへ来て腰をおろした。(「歯車」一)

列車の中で自分に付き纏う、義兄の分身、幽霊

*琉球大学教育学部

（「ドッペルゲンゲル」）を振り切って「僕」は、帝国ホテルの知人の結婚式に一時を過ごす。「僕」の苛立つ神経は、緑色の光で一時的に癒されるが、瞬間的に脱ぎ捨てられた義兄の分身、レエン・コオトの存在で再び不安に陥れられる。

レエン・コオトは今度も亦僕の横にあつた長椅子の背中に如何にもだらりと脱ぎかけてあつた。（「歯車」一）

義兄は、「僕」の周辺に、その分身が四日前から同伴者として付き纏っていた事になる。

自殺する義兄は、死の同伴者として「僕」に対して誘惑の手を差し伸べていた事になる。「僕」は、ここで帝国ホテルの従業員の何気なく発した言葉、「All right」という謎の言葉の意味を了解する。死んで行く義兄は、その半身が「僕」に対して死に対する誘惑の手を差し伸べていた事を了解する。

が、時々戸の外に翼の音の聞えることもある。どこかに鳥でも飼つてあるのかも知れない。

（「歯車」一）

運命は、予兆の兆しを以つて顕れる。鳥の羽音、翼の羽ばたき音は、言うまでも無く死の予兆である。「歯車」(一)は、主としてこの時期芥川龍之介を悩ませた義兄西川豊の自殺に関連した離魂病の症例を「僕」を死に誘い込む予兆として描いて

いる。このドッペルゲンゲルの症状は、「歯車」(一)以後は、影を潜めて付随的に二、三登場するのみである。

斉藤茂吉の青山脳病院で診察を受けて宿泊、執筆中の帝国ホテルに帰宅したときの記述がある（斉藤茂吉日記「神経衰弱ト胃病トガアル」大正十五年一月十三日）、前記は一年前の記録であるが、一年前から青山脳病院に通院して精神安定剤を調合して貰っていた。

或精神病院の門を出た後、僕は又自動車に乗り、前のホテルへ帰ることにした。が、このホテルの玄関へおけると、レエン・コオトを着た男が一人何か給仕と喧嘩をしてゐた。（「歯車」二）

この場面は、既に轢死死体となった義兄の分身が、「僕」の宿泊する帝国ホテルにまで現れて僕の存在を脅かす場面である。「僕」は、帝国ホテルに入館する事を取りやめて銀座三越の北側、「近藤書店」で自己の宿命を認識する事になる「希臘神話」の本を手に入れる。最終的に義兄の分身は、東海道線藤沢駅を下車して鶴沼の東屋（あずまや）旅館に退避する「僕」の横を葬列となって通り過ぎる。「僕」は、義兄の分身の暗黙裡に「僕」に強要するものが何であるか、運命の予兆として認識するのである。

註1 「歯車」（「ドッペルゲンゲル」）は、著者自身が自ら作品中に説明を付け加えているように欧州からの輸入品である。「第二の僕、一独逸人の所謂 Doppelgaenger は仕合せにも僕自身に見えたことはなかつた。しかし亜米利加の映画俳優になつたK君の夫人は第二の僕を帝劇の廊下に見かけてゐた。」（「歯車」四）、しかしこの原型は、早くに少年時代の採集資料集「椒園志異」（「影の病」）にある。以下、「影の病」全文を引用しておきたい。第一高等学校時代の読書体験の備忘録は、直接後年の「二つの手紙」（「黒潮」大正六年九月）「影」（「改造」大正九年九月）の創作構成に直接影響している。

「北勇治と云ひし人外より帰り来て我居間の戸を開き見れば机におしかかりし人有り 誰ならむとしばし見居たるに髪かみの結び様衣類帯おびに至る迄我が常につけし物にて、我後姿を見し事なけれど寸分たがはじと思はれたり面見あひまばやつかつかとあゆみよりしに あなたをむきたるまゝにて障子の細くあきたる間より縁先に走り出でしが、追かけて障子をひらきし時は既に何地ゆきけむ見え、家内にその由を語りしが母は物をも云はず眉をひそめてありしとぞ、それより勇治病みて其年のうちに死せり 是迄三代其身の姿を見れば必ず主死せしとなん」（奥州波奈志）唯野真葛女著 仙台の醫工藤氏の女也

「二つの手紙」は典拠「アンドレアス・タアマイエルが遺書」（「諸国物語」）の露骨な模倣であり、「影」は余りに実験的過ぎて今日読んでも脈絡を正確に把握し難い。「ドッペルゲンゲル」を素材に創作したのは、この時期芥川龍之介、谷崎潤一郎、佐藤春夫等で当時盛んになった探偵小説、心靈学の影響が大きい。類似の作品に「妙な話」（「現代」大正十年一月）「奇怪な再開」（「大阪毎日新聞」大正十年一月）があるが、後者は鳴外「鼠坂」、鏡花「三尺角」が典拠であると吉田精一が指摘している。ゲーテの自伝小説にも自身の未来の姿を透視する「ドッペルゲンゲル」の場面があり、こうした複合的影響下に「歯車」(一)の「ドッペルゲンゲル」の場面が、創作されたと考えられる。

僕は東海道線の或停車場からその奥の或避暑地へ自動車を飛ばした。運転手はなぜかこの寒さに古いレエン・コオトをひっかけてみた。(中略)すると低い松の生えた向うに、一恐らくは古い街道に葬式が一行通るのをみつけた。「歯車」六)

この「歯車」(六)冒頭箇所は、一年前に鶴沼で浄書され遺稿として残された作品「凶」(「遺稿」大正十五年四月十三日)の焼き直し、部分的に再生した箇所である。「凶」は、「大正十二年の冬(?)」「大正十三年の夏」「大正十四年の夏」「大正十五年の正月十日」の四つの神秘的現象を羅列することで「僕」が迫り来る死の足音を聞く小品である。

「歯車」の「僕」は、個体としての自己そのものが既に分裂している。「歯車」の登場人物、義兄は肉体そのものが分裂し、本体を離れた分身が(「幽霊」)が「僕」の存在を脅かすが、それ以前に「僕」の意識も分裂している。「歯車」では、「僕」が肉体を離れたもう一方の僕に三度呼びかける場面がある。すなわち鏡に向かって「僕」は、自己確認を行う。

僕は壁にかけた外套に僕自身の立ち姿を感じ、急いでそれを部屋の隅の衣装戸棚の中へ抛りこんだ。それから鏡台の前へ行き、ちつと鏡に僕の顔を映した。「歯車」一)

この場面は、自己の個体としての分裂の不安に苛まれる「僕」の日常的な動作である。中国で購入した特殊な布地で作った芥川夫人手作りの死の床で着ていた浴衣に対して後年夫人は、常識人としての感性で折り畳んで展示される事を望んだ。「僕」は半生を欧州に過ごした先輩彫刻家と帝国ホテルで再会して、「僕」の部屋でひと時を過ごす。この相手は、高村光太郎かも知れない。

彼は僕の部屋へ来ると、鏡を後ろにして腰をおろした。(中略)僕はふと口を嚙み、鏡の中に彼の後ろ姿を見つめた。「歯車」三)

この先輩彫刻家の後ろ姿を鏡の中に見つめる「僕」は、一見平静な個人としての自我を垣間見せているが、そうではなくて次に引用する決定的なドッペルゲンゲルの前兆である事が判明する。

僕は久しぶりに鏡の前に立ち、まともに僕の影と向ひ合った。僕の影も勿論微笑してゐた。僕はこの影を見つめてゐるうちに第二の僕のこ

とを思ひ出した。(中略)死は或は僕よりも第二の僕に来るのかも知れなかつた。若し又僕に来たとしても、一僕は鏡に後ろを向け、窓の前の机へ帰つて行つた。「歯車」四)

自殺した義兄の半身、分身は「僕」を死の世界に導く誘惑者として、「僕」の生の意欲を打ち砕く死神の象徴として「僕」に付き纏い、離れない。「レエン・コオト」は、死の世界に「僕」を先導する象徴である。こうして「僕」は、自らの個体が分裂する危機を認識し、死は第二の「僕」の人生に訪れるかも知れないと予感する。

2. パトグラフィ(「Pathographie」病跡学)¹²

三好行雄「みずから死をえらぶ作家の心象に、最後に明滅した(他者)は、芭蕉とイエスだったようである。」(「芥川龍之介論 枯野の詩人」という評価があるが、取りも直さず芥川龍之介の文芸的英雄主義、天才主義に拠る。「歯車」全編には、彼の文芸的英雄主義に傾く心情が垣間見られる。「歯車」の「僕」は発狂の恐怖に怯えているが、それは後天的なものであり、宿命であるという認識がある。「僕」の発狂に対する恐怖は、即「僕」の天才主義と結びついている。「天才の心理学」(「岩波文庫」内村祐之訳)には、ゲーテやヘルダーリン等の人格崩壊に瀬戸際で偉大な業績を残した天才の事例がある。

「気遣ひの息子には当り前だ。」(「歯車」四)

言い間違いや失語症の軽微な事例を発狂の前兆と受け取って「僕」は、宿命的な恐怖感を覚える場面である。先天的な宿命感に囚われている「僕」は、当然の事として英雄たちの末路に無関心ではいられない。

ナポレオンはまだ学生だった時、彼の地理のノオト・ブツクの最後に「セエント・ヘレナ、小さい島」と記してゐた。「歯車」三)

こうした宿命論に傾斜する「僕」の心情は、「人生は地獄よりも地獄的である」(「侏儒の言葉」地獄)という過去に書き付けた断片に、さらには「地獄変」(「大阪毎日新聞」大正七年五月)の主人公の絵死の運命に思い及ぶ。「僕」の文芸的英雄主義は、狂死した西洋の巨人、ゴーゴリ、モーパッサン、ストリンドベリー等の人生に肉薄すべ

く身辺の些事をも利用しないでは措かない。治りたがらない病人は、結局治療の方法が見出せない。「子曰はく、之を如何、之を如何と 曰はざる者は、吾之を如何ともする末きのみ。」（「論語」衛霊公第十五）、孔子様もいう如くに自ら覚醒なき人間に目覚めは無いのである。

「僕」は、この場合は芥川龍之介と言ひ換えてもいいが、狂死した西洋の天才の人生に自己の運命を近づけるべく眼病さえも発狂の兆候として認識する。

のみならず僕の視野のうちに妙なものを見つけ出した。妙なものを？と云ふのは絶えずまはつてゐる半透明の歯車だつた。（「歯車」一）後年の研究に拠れば、これは単純な眼病の一種で一時的な現象で放置しておいても取り立てて別段な事のない、一過性の眼球の一現象である。しかし、「僕」は、これを迫り来る発狂の恐怖に結びつけた。後年、小島政次郎は頻繁に眼底の歯車を視界に感じるようになった自己の老後の生活を披露して、眼球の痙攣を誇大に考え世紀末の巨人の運命に自らを重ねた偉大なる先輩作家、芥川龍之介の小児性を揶揄している。

けれども僕を不安にしたのは彼の自殺したことよりも僕の東京へ帰る度に必ず火の燃えるの

を見たことだつた。僕は或は汽車の中から山を焼いてゐる火を見たり、或は又自動車の中から（その時は妻子とも一しよだつた。）常磐橋界隈の火事を見たりしてゐた。（「歯車」二）

これは「僕」の人生を破局に導く導火線ともなった「僕の姉の夫」の轢死自殺の原因になった放火事件を運命の予兆として事前に「僕」が察知する場面である。

「何故つて、幾何容易い字でも、こりや変だと思つて疑ぐり出すと分らなくなる。此間も今日の今の字で大変迷つた。紙の上へちやんと書いて見て、じつと眺めてみると、何だか違つた様な気がする。仕舞には見れば見る程今らしくなくなつて来る。一御前そんな事を経験した事はないかい」（「門」一の一）

これは、漱石「門」の主人公が職場での疲労で軽い離人症の症状を示した場面、漱石自身の実体験であろう。妻は慣れていると見えて軽く受け流して気に留める様子もない。

「細君は別に呆れた様子もなく、若い女に特有なけたまゝしい笑声も立てず、」（「門」一の一）と記述され主人公の軽い精神障害は、夫婦の日常生活の中に埋没してしまう。

「歯車」の「僕」は、些細な心理学上の錯誤、

註2 「歯車」のバトグラフィ（「病跡学」）で扱われた課題で、動かす事の出来ない事実（「気違ひの息子には当り前だ。」四）とそうでない課題とがある。芥川龍之介の生誕の年に実母発が狂したという事実、そして当時一世を風靡した「天才と狂気」に関係する文芸的英雄主義の流行、この二つが「歯車」の無数の病理学上の症例の根拠である。

僕は風呂にはひりに行つた。彼は午後十一時だつた。風呂場の流しには青年が一人、手拭を使はずに顔を洗つてゐた。それは毛を抜いた鶏のやうに痩せ衰へた青年だつた。僕は急に不快になり、僕の部屋へ引換した。すると僕の部屋の中に腹巻が一つぬいであつた。僕は驚いて帯をといて見たら、やはり僕の腹巻だつた。（以上東屋にあるうち）

「鶴沼雑記」（遺稿 大正十五年七月）のこの文章は、一般読者にとっては意味不明瞭であり、バトグラフィ（「病跡学」）の知識なくして読解不可能である。典型的なドッペルゲンゲル（「Doppelgaenger」）、離魂病症状を忠実に記述した箇所である。時間と空間とを超えて実在しない人間、十年前の自己に対面する場面である。一種の幻覚、妄覚（「Sinnentrug」）である。この時期に何故、芥川龍之介は記録として残したか。発狂の恐怖を天才主義に結びつけた場面である。中年期の疲労した自分が、十年以前の青年期の自己と深更の風呂場で対面する。時間設定を逆転させて、青年期の自分が疲労した未来の自己に対面する、未来を透視する構図にすればゲーテの自伝小説の記述に重なる。

「僕」の、ヒポコンドリー（「Hypochondrie」心気症）の内でも顕著なのが関係念慮である。鉄道自殺を遂げた義兄は、「季節に縁のないレエン・コオトをひつかけてゐた。」（「歯車」一）、時間を前後させて「僕」は、脈絡なく身辺の「レエン・コオト」の存在に追い詰められ、この無意味な暗合に対して脈絡の整合性を付けようと努力する。部外者の給仕の何気ない発言、「All right」の言葉の断片を記憶して、すべては自殺した義兄が「僕」を死地に導くための予兆であった、と言語上も関係念慮の症状を見せる。

症状を誇大に解釈し重大な意味づけを為そうと腐心している。その第一の理由は、「気違ひの息子には当り前だ。」(「歯車」四)という本人の抜き難い自覚であり、第二には自身の尊敬する世紀末の欧州の巨人達と一体化したいという自らの文芸的英雄主義である。

するといつか道を間違へ、^{あをやまさいぢやう}青山齋場の前へ出てしまった。(中略)のみならずこの墓地の前へ十年目に僕をつれて来た何ものかを感じない訣にも行かなかつた。(「歯車」二)

これは斎藤茂吉の青山脳病院に精神安定剤を受け取るために通院中、偶然に十年前に漱石の葬儀が執り行われた青山齋場にまぎれ込んだ偶然を記述した場面であるが、「僕」は漱石の文壇生活の終焉の場を自己の人生の終結に結び付けている。これなども客観的には、たんなる偶然であるが、母親からの精神病の遺伝を確信している「僕」は日常生活の些細な錯誤も重大に考え落ち込んでしまう。

銀貨を一枚投げ出すが早い、匆々このカツプエを出ようとした。「もし、もし、二十銭頂きますが、……………」僕の投げ出したのは銅貨だつた。(「歯車」三)

神経疲労からの失語症も「僕」にとっては、精神病の兆候のように思われ不安に苛まれる事になるし、対談相手の些細な失言も人格を傷つける重大事件である。

「さうだ。あのシユシユン……………」僕はなぜか^{しゆしゆんする}朱舜水と云ふ言葉を正確に発音出来なかつた。(「歯車」四)

「歯車」のパトグラフィ(「病跡学」)を考える上で重大な側面の一つは、「僕」の存在を脅かす女の存在である。自己の存在を精神、肉体両面から捕捉できなくなった「僕」は、自己嫌悪や孤独感、疎外感や脅迫観念から女人に救いを求め、同時に女人からの逃避行動を取る。女人との同化と同時に逃走である。

「君はちつとも書かないやうだね。『点鬼簿』と云ふのは読んだけれども……………あれは君の自叙伝かい？」(中略)「僕もこの頃は^{ふみんじやう}不眠症だがね。」「僕も?—どうして君は『僕も』と言ふのだ？」(「歯車」四)

半年前に発表の『点鬼簿』では、実母、姉、父

の三人の身近な肉親の死の記憶を辿った回想で、丈艸「かげろふや塚より外に住むばかり」の句で作品を締めくくり狂気迫るものがある。

僕は時々^{まぼろし}幻のやうに僕の母とも姉ともつかない四十恰好の女人が一人、どこからか僕の一生を見守つてゐるやうに感じてゐる。(中略)それとも又何かの機会に実在の世界へも面かげを見せる超自然(てうしぜん)の力の^{しわざ}仕業であらうか? (「点鬼簿」二)

精神病理学上、「歯車」を分析する上で女人に対する執着、離反が課題である。これは、最晩年の芥川龍之介の人生上の問題が、実母を含んで女人の問題であるからである。眼底に映じる歯車の影に怯えて睡眠薬でつかの間の睡眠を得る「僕」は、帝国ホテルの一室で救済、安らぎを与える女人と「僕」の人生を破滅に導く女人と二人に夢中で対面する。

長い^{かき}生け垣のあるプラツトフオオムだつた。そこには又Hと云ふ大学生や年をとつた女も^{たなす}行んでゐた。(中略)すると或寝台の上にミイラに近い裸体の女が一人^{ひとり}こちらを向いて横になつてゐた。それは又僕の^{ふくしう}復讐の神、一或狂人の娘に違ひなかつた。……………(「歯車」三)

前者は軽井沢駅の停車場で芥川龍之介とひと夏の一時を語り合った堀辰雄、片山広子の思い出の断片が横切った場面である。「のみならず彼女と話してゐることに或愉快な興奮を感じた。(「歯車」三)とあるように精神の静謐のひと時であった。後年、堀辰雄「物語の女」(「楡の家」一部)は、その証明である。そして後者は、「秋」(「中央公論」大正九年四月)の素材提供者、別稿「秋」で描かれた人妻秀ひで子の記憶の断片である。

「もし、もし、二十銭頂きますが、……………(「歯車」三)は、日常生活上の些細なトラブルであるが、「僕」はこれを周囲からの敵愾心と受け取り打ちひしがれる。「セレント・ヘレナ、小さい島」(「歯車」三)という英雄の歴史的事実の偶然に自己の人生の宿命を関連付ける、誤った自己関連付け(「fehlerhafte Eigenbeziehung」)が見られ、極めつけは夢の中の記憶、楽しかった軽井沢での片山広子、堀辰雄との避暑地の出来事も義兄の家の全焼の出来事に重なり、夢の中で「僕」を脅かす強迫観念的なものに変貌している。

「大火事でしたわね。」「僕もやつと逃げて来たの。」（「歯車」三）というように片山廣子と堀辰雄の会話も夢の中で「僕」の存在を脅かす恐怖に変貌しうる。結果的には、避暑地に横付けされた列車の乗客となった「僕」の前には、「ミイラに近い裸体の女」（「歯車」三）、芥川龍之介を最終的に自殺に追い込む運命の女、秀しげ子の肉体が夢中の彼に恐怖を与える。「僕」を滅亡に導く復讐の神、狂人の娘は夢中においてまで追撃の手を緩めない。言うまでもなく追跡妄想（「Verfolgungswahn」）であり、こういう認識感覚そのものが妄想着想（「Wahneinfall」）とでも言う他に仕方のないものである。

「一切の議論は灰色で、緑なのは黄金色の生活の樹（“Grau ist alle Theorie, Und grün des Lebens goldner Baum”）」（「文藝雑感」大正十一年十一月十八日）の典拠はゲテ「色彩論」であるが、「歯車」の中には、極めて技巧的に「色彩論」が効果的に取り入れられていて「歯車」が、創作作品として徹頭徹尾理性に依り制御された作品である事を証明している。「緑いろの笠をかけた、背の高いスタンドの電燈が一つ硝子戸に鮮かに映つてゐた。それは何か僕の心に平和な感じを与へるものだった。」（「歯車」一）「歯車」全編、緑と赤、黒と白の色彩のコントラストに満ちていて「僕」の精神の平衡感覚に微妙な翳を与えている。「色彩論」の完全なる応用編が「歯車」であるとも言える。「（この黄いろいタクシイはなぜか僕に交通事故の面倒をかけるのを常としてゐた。）そのうちに僕は縁起の好い緑いろの車を見つけ、」（「歯車」二）日常生活に頻繁に点滅する色彩の交換に一喜一憂する「僕」の神経は、「僕」以外の他の誰にも理解されない生活上の符号的一致である。「歯車」後半になるにつれて、点滅する色彩そのものが「僕」を精神的に追い詰めていく働きをする。「僕はこのカツエの薔薇色の壁に何か平和に近いものを感じ、」（「歯車」三）「それらの紙屑は光の加減か、いづれも薔薇の花にそつくりだった。僕は何ものかの好意を感じ、」（「歯車」四）やがて色彩は赤に統一され、というよりも符号的な一致で、関係妄想で「僕」は、被害妄想の域に追い込まれる事になる。「歌集『赤光』の再版を送りますから・・・」（中略）「一赤いワン・ピ

イスを着た女は小声に彼等と話しながら、」（「歯車」五）、歌集「赤光」と女の服装との連鎖的な反応は、偶然の一致ではなくて必然的、連鎖的符号的一致と化して「僕」を心理的に追い詰めて行く。

「僕はふと彼の顔に姉の夫の顔を感じ、」（「歯車」六）、これは錯覚、心理学的に言い換えれば錯覚誤認である。数ヶ月前の作品「蜃気楼」（「婦人公論」昭和二年三月）では、夢中の「僕」に文化住宅の前で話しかけるトラックの運転手は、誰だか夢中の中では判別することが出来なかったが、夢の覚醒の後に認識すると三、四年以前一度だけの面識のある婦人記者だった。「何だか意識の隅の外にもいろいろなものがあるやうな気がして、・・・」（「蜃気楼」二）というのが作中の「僕」の認識である。数ヶ月前夢中の出来事であったのが「歯車」（六）では、錯覚誤認は現実のものとなってきている。「意識の隅の外にもいろいろなものがある」というのは、クレッチマー「天才の心理学」にある分裂病の臨床例の典型である。「蜃気楼」では、夢中の出来事であるが、「歯車」（六）では、日常生活の経験として記述している。

3. 敏感関係妄想（「sensitiver Beziehungswahn」）²³

「のみならずサンダルを片つぽだけはいた希臘神話の中の王子を思ひ出させる現象だった。」（「歯車」二）、これについては「芥川龍之介全集」（筑摩全集類従4）の脚注は「未詳」とあったが、「加藤明『歯車』論—ギリシア神話の暗号をもとに—」（「日本文学」昭和五十九年一月）に詳細な解説がある。これに拠ると「サンダルを片つぽだけはいた希臘神話の中の王子」（「イアンソン」）は、妻メディアによりその二心のために復讐される。「僕」が自らをイアンソンに擬えるのであるのならば「女性による復讐」であるが、言うまでもなく夢の中で「僕」に肉薄する秀ひで子の暗合に符号する。「僕の復讐の神、—或狂人の娘」（「歯車」三）に連鎖する「僕」の意識は、明らかに追跡妄想（「Verfolgungswahn」）に陥っている。

「一番偉いツオイスの神でも復讐の神にはかな

ひません。……」(「歯車」二)、「同時に又復讐の神に追はれたオレステスを考へない訣にも行かなかつた。」(「歯車」五)、希臘神話の「復讐の女神」(「エリニユス」)は、前掲加藤論文に拠れば「主として肉親間の、しかしまた一般に殺人、その他の自然の法に反する行為に対する復讐あるいは罪の追及の女神」(高津春繁「ギリシア・ローマ神話辞典」)である。「僕」は、「肉親間の殺人」のために追跡妄想の神経障害に陥ったのである。これについては、「気違ひの息子には当り前だ。」(脚注「芥川の生まれた年、実母は発狂した。»)という「僕」の告白が参考になる。「僕」は、意識化で実母を葬り去る事で、発狂の迫り来る恐怖と戦っている。「僕」の潜在意識は、実母の存在を抹殺することで、追跡妄想を振り切ろうとしている。

発狂した実母の存在を意識下で抹殺する操作、被害念慮の意識を断ち切る「僕」の心理上の操作は、文学技巧では「肉親間の殺人」の意識に結びつく。この種の観念的、心理的操作が「僕」の意識下で成された事に就いては、以下の伊東静雄の抒情詩が参考になる。「死んだ女はあつちで／ずっとおれより賑やかなのだ」(「田舎道にて」)、これは恋情を殺して孤独で孤高な詩精神を生きる詩人の意識化の殺人を象徴的に表現している箇所である。

「肉親間の殺人」を意識下で連想させる発端は、繰り返せば「サンダルを片つぽだけはいた希臘神話の中の王子」を「僕」が、関係妄想で想起したからである。そしてその直前に「僕」の心理状態を記述した以下のような文章がある。「それはこの一二年の間、いつも僕に恐怖だの不安だのを与へる現象だつた。」(「歯車」二)、「僕」に「肉親間の殺人」を連想させ心理的に窮地に追い込むのは、「僕」の錯覚誤認を発端としている事は明白である。「鶴沼雜記」(「遺稿」大正十五年七月)には、象徴的な次のような一文がある。

唯灰色の天幕の裂け目から明るい風景が見えるやうに時々ふだんの心もちになる。どうも僕は頭からじりじり参つて来るのらしい。

自分の精神世界が、ほぼ常時灰色の色彩に覆われてしまい時々射す日の光を支えに辛うじて保たれていると告白している。同じ事を一年後に芥川

龍之介は、言葉を変えて次のように言っている。「談話」(「於新潟高校」昭和二年五月)は、生前の印象深い会話を残している。「天才には随分悲惨な最後を遂げた人も多いですね。」という発言に続いて。

芥川 さうです。スウィフトには凄い話があります。冬の曇つた日、窓からしきりに外を眺めてゐるのださうです。『何を見てゐる』のかと家人が聞くと、一本の枯木を指しながら、『俺もあの木の様に頭から先に参つて了ふのだ』と云つたさうです。(葛巻義敏編「芥川龍之介未定稿」)

これなどは自己の運命を天才のそれに近づけるべく認識している芥川龍之介の素顔が、垣間見られる場面である。宿泊先の篠田旅館での座談会の記録は、天才が狂人の世界を垣間見せているという自説を披露する芥川龍之介の発言に一座が白ける場面を記録に残している。「芥川 さうでせうなあ。精神病者は最も進んだ人間だと云つていゝですね。(皆な暫く沈黙。)」(「談話」昭和二年五月)

これなどは後年、勝本清一郎が北村透谷のパトグラフィ(「病跡学」)を述べた箇所との一致を見せている。「外では太陽が直射しているのに鑑戸をおろした家の薄明のなかで宴会がひらかれているような精神状態です。」(「座談会明治文学史」)、「歯車」(二)で「僕」の精神状態を「肉親間の殺人」の罪科に陥れる「希臘神話の中の王子」を想起させる出来事は、「僕」の敏感関係妄想(sensitiver Beziehungswahn)であると結論付ける事が出来る。遺稿として遺すべく意図した「歯車」の中で「僕」の精神を強迫観念として支配している女人の残像は、狂死した実母の残像であることが判明する。

「歯車」の「僕」を苦しめるもう一つの強迫観念は「僕の復讐の神、一或狂人の娘」(「歯車」三)、秀しげ子による追跡妄想(Verfolgungswahn)によりもたらされた「僕」の被害妄想、ある種の妄覚(Sinnentzug)である。「歯車」の「僕」を追い詰める強迫観念の一つ実母の狂死については、「僕はいつか西廂記を読み、土口氣泥臭味の語に出合つた時に忽ち僕の母の顔を、一瘦せ細つた横顔を思ひ出した。」(「点鬼簿」一)という芥

川龍之介自身の事を書いた記述が参考になる。秀しげ子に由りもたらされた関係念慮、追跡妄想は遺された遺書が、この間の事情を明らかにしている。実母と秀しげ子について「畢竟気遣ひの子だつたのであらう。」「が、執拗に追いかけるの

には常に迷惑を感じてみた。」(遺書「小穴隆一宛」という記述を残していて、実母芥川フクと愛人秀しげ子の二人が、芥川龍之介の深層心理を支配する宿命の女人であった事が判明する。

註3 先に引用した「談話」(「於新潟高校」昭和二年五月)には、学生時代の採集資料集「楸園志異」(「影の病」)の要約が、自らに起りうる神秘主義的な心霊現象であるという芥川龍之介の発言を拾遺している。「芥川 さういつて了へば一番解決がつき易いですがね。中々さう云ひ切れない事があるのです。或人の話で、自分の部屋へ入つたらちやんと机に向つてゐる第二の自分が立ち上つて出て行つたので、母に話したらいやな顔をしたさうです。そして間もなくその人は死んださうです。その家は代々さうして二重人格が現はれては人が死ぬんださうです。(中略)芥川 ゲエテも現れたといつてます。自分の馬に乗つて行くのをゲエテは見たさうです。」、これなどは神秘主義に心情的に傾斜した晩年の芥川龍之介の傾向をよく顕している。

丸橋由美子「芥川龍之介『歯車』」(「芥川龍之介Ⅱ」日本文学研究大成)は、ストリンドベルグ「地獄」「伝説」が「歯車」に与えた影響を考察した比較文学研究である。「ストリンドベルグ全集地獄・伝説」(「新潮社」大正十四年)を芥川龍之介が愛読した事は明白である。大学卒業後に三菱商事ベルリン支店勤務の職歴を有する秦豊吉が、独逸語訳ストリンドベルグ全集から「地獄」「伝説」を翻訳したのは、おそらくは芥川龍之介からの有形無形の示唆によるものであらう。「地獄」「伝説」は、スウェーデンボルグの神秘主義の影響下にオカルト思考を示すストリンドベルグの自画像である。前掲丸橋論文には、「地獄」「伝説」を介して芥川龍之介が、ダンテ「神曲」に接近し最終的に「聖書」の神秘思想に理解を及ぼした記述がある。

「歯車」執筆と相前後して「(追記。この後に三日を経て正宗氏の『ダンテに就いて』を読んだ。感慨少からず。)(「文藝的な、余りに文藝的な」九)と記した。「ダンテに就いて」(「中央公論」昭和二年三月)から示唆を得て、「歯車」の神秘的傾向が助長させた可能性はある。かつて「一塊の土」(「新潮」大正十三年一月)発表後に、正宗白鳥「郷里にて」(「文藝春秋」大正十三年二月)で作品を賞賛された芥川龍之介は、感謝の書簡を送った。「夏目先生に褒められた時以来最も嬉しく感じました。」(「正宗白鳥宛書簡」大正十三年二月十二日)、「公論」は敵愾より出に如かず」で徳田秋声と並ぶ自然主義の牙城、正宗白鳥からの支持は得難いものであったはずだ。それに、正宗白鳥は、付け焼刃でないキリスト教の知識があり、聖書についての理解は、芥川龍之介よりは先んじていた。

「が、時々戸の外に翼の音の聞えることもある。どこかに鳥でも飼つてあるのかも知れない。(「歯車」一)「が、どこかに翼の音や鼠のきしる音も聞えてみた。」(「歯車」三)、「歯車」の「僕」に近づく死の足音、鳥の羽音が死の接近を知らせる象徴であることは、直接的には「神曲」を典拠とする。というより西洋社会の一般的風習であらう。「歯車」での記述は、極めて技巧的であり「僕」の作中での敏感関係妄想(「sensitiver Beziehungswahn」)そのものを疑問視させるほどである。「歯車」の技巧の世界は、「藝術その他」(「新潮」大正八年十一月)で見せた固有の方法論が未だ健在である事を証明しているかも知れない。「歯車」で展開された病跡の痕跡は、理路整然としている。このことから松本清張「文字通り教科書を見てその通りに書いたのではないかと考えるのである。」(「昭和史発掘」という疑問の声も寄せられる事になった。